

A Wizard of Earthsea 再読

—— テクストの影とは何か ——

織 田 まゆみ

I

2001年に、外伝というべき短編集 (*Tales from Earthsea*) と、続編である長編 (*The Other Wind* 以下 *Wind* と略す) が発表され、*Earthsea* 最後の書とも記載されていた1990年の *Tehanu* とあわせ、いわゆるアースシー3部作 (*A Wizard of Earthsea* 1968 以下 *Wizard* と略す。 *The Tombs of Atuan* 1971 以下 *Tombs* と略す。 *The Farthest Shore* 1971 以下 *Shore* と略す) は、ここに来て、全6さつ、30年以上も続くシリーズとなった。作者 Ursula K. Le Guin (1929-) は、SF連作ハイニッシュ・ユニヴァースシリーズも長く書き続けているが、このアースシーシリーズでは、ゲド (Ged) やテナー (Tenar) の人生に寄り添いながらの物語展開をしているところが特徴的で、その結果、彼らが生きた時代の変化・変遷を描いたともいえよう¹。

しかし、アースシーシリーズ前半の3さつに関する確固たる評価に比べ、後半の3さつの評価は現在進行形である。特に前3さつの、精緻で均斉のとれた描写、静謐で思索的な雰囲気を楽しむ人にとって、後半に色濃くでてきた「政治的」要素は戸惑いを与えがちだ。だが、ル・グウィン自身が *Tehanu* に関して、"I had

"revised" Earthsea." (*Revised* 12) と述べているように、作者には、既存の評価を賭けても、書かなくてはならない必然があったと考えたらどうだろうか。作品の基調も、前半の3さつが魔法使いの学院ロークの長たちのいう「均衡」であるのなら、後半の3さつのキーワードはゲドの師オジオン (Ogion) が臨終の際つげる「変化」である。しかし今求められているのは、前後2つの3部作の特徴づけをする以外に、全巻を視野にいれた上での諸作品の考察なのではないだろうか。

これまで私は、主として後半に軸足を置き、第一作 *Wizard* を正面から取り上げたことはなかった。というのは、この作品は日本でも河合隼雄などがある種の熱狂をもって取り上げたように、ユング心理学の影の分析がぴったりと当てはまり、一度そのような見方を学習してしまうと、そこから抜け出るのは難しいからだ。ユングを読んで書いたのではないかという疑問も湧いてくるほどの親和性ではあるが、作者は "I wish I had known Jung's work when I wrote the book" (*Language* 169) と、*Wizard* の一年後に刊行された *The Left Hand of Darkness* (1969) について発言していることから、作者のことばを額面通りとるのなら、ユングの直接の影響はないといえる²。しかし、老荘思想と並んであまりにも定着しているユング的批評を無視することは不可能に近い。したがって私もここから始めることにする。ただ最初に、ユング心理学に関しての私見を述べておきたい。

ユング (C. G. Jung 1875-1961) がフロイト (Sigmund Freud 1856-1939) と同様に、人間は意識だけでなく無意識の領域をもっていることを前提に、自分の論を発展させたことの功績はとて大きい。無意識を認めることは、統一され一貫した主体性を否定し、いかに主体が分裂しているのかを示すことになる。つまり、自分の

中に意識では統制できない領域を抱えていると考えることは、自分がどのように構築されているのかという問題とつながる。ユングは無意識の領域を個人的無意識と集合的無意識にわけ、後者に、それ自体は表象不可能ではあるが、イメージを通して表現される元型を仮説した。これが「影」「ペルソナ」「アニマ」などである。「アニマ」は男性が抱く内なる女性像で、男性も、あるいは男性中心の文化も、実は内部に「女性的」な面があり、それが魂の導き手となることもある、という。このように考えることは、それまで低く位置付けられていたものを掘り起こし光をあてるという効果をもつだろう。しかし問題は「アニマ」の対概念、女性が抱く内なる男性像「アニムス」である。ユングは二重に「アニムス」をおとしめる。まず、「アニマ」と対称的であろうとしつつ、彼の筆は意図を裏切る。彼のアニムス描写には女性蔑視と呼んでよい視線がつきまといている³。そしてもうひとつ、現実社会における女性の位置を無視して、対称的に語ろうとすることは、結果として現状維持に加担することになる。つまり Wehr が述べるように "Jung's assumption that men and women are in equal and symmetrical relationships with their contrasexual sides involved a total lack of awareness of the oppression from which women suffer." (120) なのだ。しかし、これをもってユングを全否定するより、彼が出した元型的イメージを社会的歴史的な文脈との関係で見直す作業こそがこれからの課題なのではないだろうか⁴。

本論稿では、ユングに対する以上のような距離感を意識しつつ、*Wizard* での影とは何かを考察し、影出現との関連が深い女性像を分析、その上で「影の統合」を再考してみたい。

II

Wizard は、象徴的ではあるものの明解でわかりやすく、アースシーシリーズ中、最も素直に「すばらしい児童文学」との称讃をうけるものだと思われる。主人公の英雄が魔法使いの助力を得て、邪悪な者・怪物を退治するという定石をひっくりかえし、色が浅黒い魔法使いが主人公、敵は自分の高慢さが生み出した影、解決は征伐ではなく、影の受け入れ、とみえる *Wizard* の作品世界は、外界の冒険と内界の成熟を同時に呈示している。

Wizard は後に竜王や大賢人となった男の "this is a tale of the time before his fame, before songs were made." (2) といった回顧的表現から始まる。幼名がダニー (Duny) だったゲドは、ゴントの寒村の鍛冶屋の7番目の息子として生まれるが、母親は彼が1歳にならないうちに死んでしまう。7歳の時、おばがヤギに叫んでいるのを真似したことから、魔法の才能をもっていることがわかり、まじない師であるおばから学ぶ。しかし12歳の時、襲撃者であるカルガド兵士を霧にまくことに全力を用い、昏睡状態に陥った。この時、助けてくれたのがオジオンであり、ゲドという真の名を授けられ、彼の弟子になる。

しかしオジオンとの静かで平和な暮らしのなかで、ゲドはル・アルビの領主の娘セレット (Serret) に出会い、彼女に死霊の呼び出しや変身という高等魔術ができるかどうか問われると、力のあるところを見せつけたい思いでオジオンの書物をひらく。彼は死霊を呼び出す呪文のところに吸いよせられていった。

Looking over his shoulder he saw that something was crouching beside the closed door, a shapeless clot of shadow darker than the darkness. It seemed to reach out toward him, and to whisper, and to call to him

in a whisper: but he could not understand the words. (28-29)

影の予兆である。オジオンが白く輝く杖とともに飛び込んできて呪文はとけたが、このことが契機となって、彼は魔法使いの学院ロークに行く決心をする。だが、乗船した船は「影号」であり、ローク学院に入るとき、"it seemed to him that ... a shadow followed him in at his heel." (44) と描写されているように、ゲドが影を伴っていることが暗示されている。そして河合が「ゲドの「影」としてぴったりの人物」(『ファンタジー』319) と述べるヒスイ (Jasper) との出会いがすぐ続く。ヒスイは都会的で育ちもよく、ゲドとは対照的な人物であるが、両者とも何となく虫が好かない思いがするのは「投影をうける側も、投影をひきだすに値する何かをもっている」(河合『現象学』48) からに他ならない。ゲドは親切なカラスノエンドウ (Vetch) や、Reid が "spiritual guide" (34) と見なす声をもたない動物オタク (Otak) との暖かい交流を一方で持ちながら、ヒスイへの対抗心をばねにして勉学に励んでいく。だが長たちの強調する「均衡」に対しては "surely a wizard ... was powerful enough to do what he pleased, and balance the world as seemed best to him, and drive back darkness with his own light." (56) と考えている。

したがって、15歳の夏至の夜、ゲドがヒスイに焚きつけられてとうとう死霊をよびだす魔術を使うのは、ヒスイへの競争心、己の自尊心、長たちへの反発、己の力を試したいという欲望などがあわさった "all things were to his order, to command. He stood at the centre of the world." (77) という全能感であろう。そしてこれは神々に対する不遜 (hubris) に通じるものである。ゲドが呼び出したのは 1000 年以上も前に海に沈んだエルファーラン

(Elfarran) であった。しかし死霊と共に影もでてきてゲドにとびかかる。

he [Vetch] saw the lump of shadow that clung to Ged, tearing at his flesh. It was like a black beast, the size of a young child, though it seemed to swell and shrink; and it had no head or face, only the four taloned paws with which it gripped and tore. (79)

大賢人ネマール (Nemmerle) が呪文を押さえ、天地の裂け目を閉じ、ゲドから影を追い払ったが、体力を使い果たし死んでいった。ゲドは意識不明のまま1ヶ月をすごし、半年以上病床にいた。

それから彼は放たれた影をおそれ、いつも考えながら生きることになる。というのは、"Evil, it wills to work evil through you [Ged]. The power you had to call it gives it power over you: you are connect." (85) だからだ。影は、18歳の彼がロックを卒業し、魔法使いとしてある島に赴任した時まで現れなかったが、意外なところにいた。仲良くなった船大工のペチバリ (Pechvarry) の子どもが病気になった時、ゲドは薬草の長の教えに反し、死んでゆく子どもの後を追っていく。つまり "Hearing the mother's wail, and seeing the trust Pechvarry had in him, Ged did not know how he could disappoint them." (102) と、嘆く両親の情に負けてしまったのだが、影は黄泉の国との境界でゲドを待っていたのだ。ゲドは杖を掲げるがそのまま気を失ってしまい、オタクが舐めてくれて命が助かる。それからのゲドは影に追われるのだが、ペンダーの竜がだした取り引きの誘惑にも負けず、オスキルのテレノンの石を利用しようというセレットの誘惑からも逃げ出して、タカに変身してオジオンのもとに帰る。そしてオジオンの助言を受け入れ、影に追わ

れる者から影を追う者となって東海域を旅する。そのときには影はゲドの姿をとるようになっていた。

ところでユングは影について以下のように述べている。

Everyone carries a shadow, and the less it is embodied in the individual's conscious life, the blacker and denser it is. If an inferiority is conscious, one always has a chance to correct it. Furthermore, it is continually subjected to modifications. But if it is repressed and isolated from consciousness, it never gets corrected, and is liable to burst forth suddenly in a moment of unawareness. (76)

つまり人格の否定的部分、隠したいと思う性質、自分自身の暗い部分などの劣等な部分を、意識が抑圧するなら、影は突然現れやすいというのである。ユングは人生における光と表裏一体の闇を強調している。ゲドに即して考えるなら、彼が影と遭遇するのは、まずセレットの誘惑、次にヒスイへの対抗心、そしてペチバリへの情にかられて、という3つの局面であろう。換言すれば性的・自尊心的・情的な3つの誘惑である。そして全誘惑に死者が関係している。つまりセレットのそれは死霊の呼び出し、ペチバリのそれは死に行く子どもをひき戻して欲しいという願望、そしてヒスイへの対抗がきっかけとなった事件は文字通り死者の呼び出しという魔法の実践である。

しかし、ゲドに関連する死者はもう一人いるのではなかろうか。それはゲドの魔法を静め、彼の代わりに死んでいった大賢人ネマールである。ネマールはオスキルの出身であった。ゲドが北の島オスキルに行くことになるのは、直接はセレット配下の誘いに応じたためだが、彼のネマールへの感情が遠因ではないだろうか。傷から回復した時、影を放った自分の行為とこれからの暗い見通しに青ざめ、

"Better I had died." (85) と思わず口走ったゲドに対し、新大賢人は "Who are you to judge that, you for whom Nemmerle gave his life?" (85) と言う。それ以降 *Wizard* にはネマールへの言及はでてこないが、*Shore* には一度だけでてくる。死霊呼び出しの魔法を勝手気ままに使う男クモ (Cob) に腹を立てた時の話をゲドがする場面だ。"I saw him [Cob] summon from the Dry Land my own old master who was Archmage in my youth, Nemmerle, for a trick to entertain the idle." (*Shore* 86) と彼は語るのだが、ゲドのしたことを考えれば、クモは、篠塚の言うように「外なる敵」(87) ではなく、そうなったかもしれないゲドの姿であろう。ネマールは、両者の共通項を示している。Thompson は、*Wizard* を個人的影、*Shore* を集合的影との関係とみなし、*Tombs* での冥界下りともあわせ、"Each book moves progressively closer to the experience of death." (194) と述べている。したがって、ゲドがペンダーの竜に立ち向かうよりも恐怖にかられているその影は、自己嫌悪・自責感情、死んで楽になりたいのにそれでも生きていかななくてはならないというつらい義務感なのではないだろうか。金原の、影が「ゲドの人格の邪悪な部分、フロイドのいうイドであると解釈されているが……もしそうなら、影と分裂した瞬間にゲドは悪くなる部分を完全に失うことになり、同時に善そのものの存在となってしまう」(83) との疑問はもっともなことだ。

だから最終的にゲドが自分の名前をつけて影と一体になる直前、影が一瞬その人の顔になる父やヒスイ、パチベリ以上に、"suddenly a fearful face he did not know, man or monster, with writhing lips and eyes that were like pits going back into black emptiness." (227) の方が、意識的反省などを超えた深い濃い影なのである。したがって "The wound is healed, ... I am whole, I am

free." (230) と叫ぶゲドの姿は、ともかく自己嫌悪や自責の念をまると抱えて生きていく決心ができたことを示しているのではないだろうか。気楽に投影を行なう子ども時代を過ぎた思春期の少年少女について、ル・グウィンは "The only way for a youngster to get past the paralyzing self-blame and self-disgust of this stage is really to look at that shadow, to face it, ... to accept it as the self --- as part of the self." (*Language* 61) と述べ、影は "The guide of the journey of self-knowledge, to adulthood, to the light." (61) だと主張している。ゲドの旅は外界の旅であると共に、無意識への旅であるが、オジオンの助言による転換は、影に憑依される危険性をもった下降する旅から、影と折り合いをつけるための上昇する旅への分岐点だったのである。影に向かい合い、影と折り合いをつけることで、ゲドは癒され、引き裂かれていた自己はひとつになった⁵のである。

III

Wizard の語り手が熱心に語らないのは、前述したネマールの死に対するゲドの思いばかりではない。女性に関してもそうである。影がでてくるきっかけとなったのはセレットの誘いにもかかわらずだ。アースシーには "Weak as woman's magic" とか "Wicked as woman's magic" という諺があり、女性はゲドのような魔法使いにはなれない。ロックも女性には門を閉ざしている。そういった土壌に加えて、*Wizard* には肯定的な女性像は少なく、女性への語り方も否定的な印象をうけることが多い。

まずゲドの生母である。彼女は彼が1歳にならないうちに死んでいて、彼には記憶はない。彼が最初に魔法の力を示すのはヤギに対してだが、Barrow はヤギを "animals of milk and warmth" (25)

と述べ、ゲドの母不在との結びつきを暗示している。母の姉妹であるおばが赤ん坊のゲドの面倒を見たが、彼女は村のまじない師という仕事が忙しく、ずっと親身な世話をしたわけではなかった。しかしゲドが魔法の才能を示してからは "now she looked at him with a new eye." (4) と彼への見方を変える。語り手は彼女が正規の魔法使いなら知っていて従うような「均衡」とか「様式」には全く無知で、彼女の知識はまちがいだらけとけなすが、しかし彼女は、ゲドの潜在力が自分の助手として縛り付けられる以上だと知ってからも、彼に "as far as she was able she taught him honest craft." (7) と教えている。彼女はカルガド襲撃の時洞穴に身を隠したが、逃げるというのもひとつの選択であろう。どうもこの女まじない師については、語りの偏向が強く感じられるのであるが、ゲドが幼児の時の母親との一体感や家庭における安心感を知らずに育ち、カルガド襲撃から村を守った功績によって初めて、周囲に認められた経験をしたことはまちがいない。ここに彼が功名心にかられざるをえなかった根があるのではないだろうか。

セレットは聖書でいえば蛇、昔話の魔女そのものである。彼女はゲドとオジオンの静かで平和な暮らしを脅かすものとして登場する。ゲドが醜いと思う彼女の描写は "tall girl of about his own age, very sallow, almost white-skinned; her mother, ... was from Osskil or some such foreign land." と書かれ、ゲドの自尊心をくすぐったり子ども扱いしたりしながら手中に落とそうとするこの黒髪の少女は、外部から来た者という特徴をしめしながら、結果としてゲドを広い経験の世界に誘い出したと言えるだろう。大賢人ネマールがオスキル出身であることは前述したが、ゲドは実際にオスキルに行った時、テレノンの領主と結婚したセレットにもう一度誘惑されることになる。この誘惑は、太古の大地の力であるテレノンの石

に、影の名前を語らせ、石を使って自分ともども国を治めようというものだった。心の中のオスキル、つまりネマールに関連する悔恨と絶望と、現実のオスキル、つまり性的かつ権力的欲望への誘いが合わさって彼を襲ったのだが、その極限でゲドは、"It is light that defeats the dark" (151) と叫ぶことで間髪その誘惑を退けた。オスキルでの経験は最もゲドの危機が強く、無意識へと深く沈潜したものだだったが、ここでもセレットはゲドが次なる状況に移動する起爆剤となったのだった。しかし彼女はその後すぐ夫に殺された。セレットは「脆く、邪なる女の魔法」の体現者だったのである。

またゲドが呼び出した死霊はエルファーランだったが、彼女を選んだのは、ロックが招いた客の中にいたオー島領主の妃の影響であろう。彼は彼女を見て "wondering if indeed this was such mortal beauty as the old tales told of." (64) と思うのだが、ヒスイが彼女を術で喜ばせたことに嫉妬する。母親や姉妹との交流なく育ち、女人禁制のロックで学ぶゲドにとって、女性イメージは貧困である。肯定感も少ない。エルファーランの呼び出しは、女性との関係性がいびつな若者の意識を反映しているのではないだろうか。したがって、彼がかろうじて心を開く女性は、カラスノエンドウの妹ノコギリソウ (Yarrow) だけである。親友の妹であり、一家の主婦という彼女は、彼を脅かす要素はもたず、家庭あるいは彼が持てなかった母親や姉妹を強く感じさせ、暖かい印象である⁶。

だがこの作品で、ゲドを無条件で暖かく受け入れ、癒し励ます人物は、オジオンではないだろうか。もちろん彼はゲドの師であり、導き手である。しかし母親がダニーと名づけたように、彼はゲドを名づけ世話をし、いっしょに暮らし、教え、助け、それでいて支配的ではない。もし、攻撃とか支配が男性的イメージであるなら、静寂を愛し、自然を逍遥する彼は、男性的とはいえないだろう。ゲド

が森の中でオジオンのことを思い出した時やってきて、オジオンの許に帰ろうと決心する前に殺されたオタクは、まるでオジオンの代理のような役割をしている。

つまり *Wizard* は、オジオンがいたからこそ、肯定的な女性像を書く必要がなかったともいえるのであるが、しかしゲドの周りに女性との肯定的な関係性をほとんどおかないことで、男たちだけの世界、ホモソーシャル関係の中での少年の成長を描いたのである。したがって当初からゲドの異性との関わりは制限されていたのだが、エルファーランの呼び出し、すなわち性への関心とネマールの死がしっかりと結びつき、彼のその後を決定的なものとしたと考えられる。カラスノエンドウが、社会の中でいわば市民として暮らし、人々との関係性を築いていたのに比べ、後年のアチュアン脱出の際ゲドが、"I go where I am sent. I follow my calling.... Where I go, I must go alone." (*Tombs* 144) と、ゲドにいっしょにいてほしいというテナーの願いを退けるのは、この緊張があるからだろう。つまり *Wizard* 以後、ゲドは人々と切り離された「英雄」として生きているのだが、その契機は男性先輩の犠牲的死ではないだろうか。ゲドは影に己の名前をつけることで勝ちも負けもしなかった。これは Hourihan が言うように "it undermines the very concept of 'victory' by subverting the dualism which underlie conventional hero tales." (47) であることは確かなのだが、同時に彼は自分から、ネマールの死を無駄にしない生き方、つまり英雄としての孤独を背負う生き方を選んだのである。

IV

Wizard をこのようにとらえると、*Shore* でゲドが魔力をすべて使い果たし、生と死の扉を閉じた理由がよくわかる。彼はネマール

とある意味では同じ行為をしたのだ。ロークから去るゲドに向かって守りの長が "He has done with doing." (*Shore* 213) とにっこり笑ったのは、青年期から持ちつづけざるをえなかった人生の重荷をやっと手放すことのできた慰労も含まれるであろう。しかし、やるべきことをして魔法の力を失った瞬間、これまでの英雄としてのペルソナがとれて、*Tehanu* でのゲドは、性と向き合い、人々との関係性を新たに結ばなくてはならなくなる。アースシーの世界も大きく変化をとげ、社会は *Wind* においてさえも、孤独な英雄に代わる新しい寄与の仕方をゲドに求めるのである。

Wizard を解釈し編集した語り手があえて語らなかったこと、あるいはうまく語れなかったことは、テキストの無意識、いやテキストの影と考えられよう。ル・グウィンはこれを抑圧せず、長い時をかけて向き合った。そしてこの姿勢こそが、アースシーシリーズ後半の作品群を生み出す推進力となったのである。

註

- 1 ゲドは *Wizard* では 18 歳ぐらいまで、*Shore* ではロークの学院生に「40 か 50 の年齢」と言われている。また、*Wind* では「70 かそこらに見えた」という記述がある。テナーは、*Tombs* で 4 歳から 17.8 歳、*Tehanu* で 42.3 歳、したがって *Wind* では 57.8 歳になる。
- 2 Barrow は、ユングとル・グウィンの父クローバー (Alfred Kroeber) との交流を指摘して、"Le Guin readily acknowledges her unconscious use of Jungian archetypes" (21) と指摘している。
- 3 "Animus opinions are invariably collective, ... If the woman happens to be pretty, these animus opinions have for the man something rather touching and childlike about them, which makes him adopt a benevolent, fatherly, professorial manner. But if the woman does not stir his sentimental side, and competence is expected of her

rather than appealing helplessness and stupidly, ..." (208, Jung, C. G. *Two Essays on Analytical Psychology*. New York: Princeton UP, 1966) ここには、アニムスを現実の男性がどうとらえるかという視点しかない。確かにユングが観察するように、一般原理、「正義」を頑固に主張するだけで臨機応変さがない「アニムスにとりつかれた女性」は存在するが、しかしこのような特徴をもつのは女性だけとは限らないだろう。

- 4 Susan Rowland は、ユングを Gothic writer ととらえることを提案している。(Jung: A Feminist Revision. Cambridge: Polity, 2002)
- 5 清水真砂子の邦訳『影との戦い』(岩波書店 1976) は名訳だと思うが、"naming the shadow of his death with his own name, had made himself whole: a man ..." (230) の後半の「己を全きものとしたのである」(邦訳 270)、あるいはあとの「影を吸収して一体となります。ゲドはそうして初めて全き人間になったのでした」(邦訳 276) の部分には抵抗感がある。ユング心理学の wholeness とのつながりで使用された気もするが、ここでの「全き」には「完璧」というニュアンスが強く、ユング心理学でいう潜在力・可能性とも違うような気がする。
- 6 彼女が腕に巻きつけているハレキ (harrekki) という小さな竜は、*Tehanu* 以降の竜と女性の親和性の先触れとも考えることができる。

引用文献

- Barrow, Craig and Diana, "Le Guin's Earthsea: Voyages in Consciousness." *Extrapolation*. 32-1 (1991): 20-44.
- Hourihan, Margery. *Deconstructing The Hero*. New York: Routledge, 1997.
- Jung, Carl Gustav. *Psychology and Religion: West and East*. Princeton: Princeton UP, 1969.
- Lasseter, Rollin A. "Four Letters about Le Guin." *Ursula Le Guin*. Ed. Joe DeBolt New York: Kennikat, 1979.
- Le Guin, Ursula K. *A Wizard of Earthsea*. 1968 London: Penguin, 1994.
- . *The Tombs of Atuan*. 1971 London: Penguin, 1974.
- . *The Farthest Shore*. 1973 London: Penguin, 1974.

- . *The Language of the Night*. 1979 New York: HarperCollins, 1991.
- . *Earthsea Revisioned*. Cambridge: Green Bay, 1993.
- Reid, Suzanne Elizabeth. *Presenting Ursula K. Le Guin*. New York: Twayne, 1997.
- Thompson, Raymond H. "Jungian Patterns in Ursula K. Le Guin's *The Farthest Shore*." *Aspects of Fantasy*. Ed. William Coyle. Connecticut: Greenwood, 1986.
- Wehr, Demaris S. *Jung & Feminism*. Boston: Beacon, 1987.
- 金原瑞人「モダンファンタジーの現代性」『武蔵野英米文学』20号 (1987) 75-87
- 河合隼雄『影の現象学』1976 講談社 (1987)
- 『ファンタジーを読む』1991 講談社 (1996)
- 篠塚久美子「Ursula K. Le Guin のファンタジー」『日本体育大学紀要』10号 (1981) 77-88